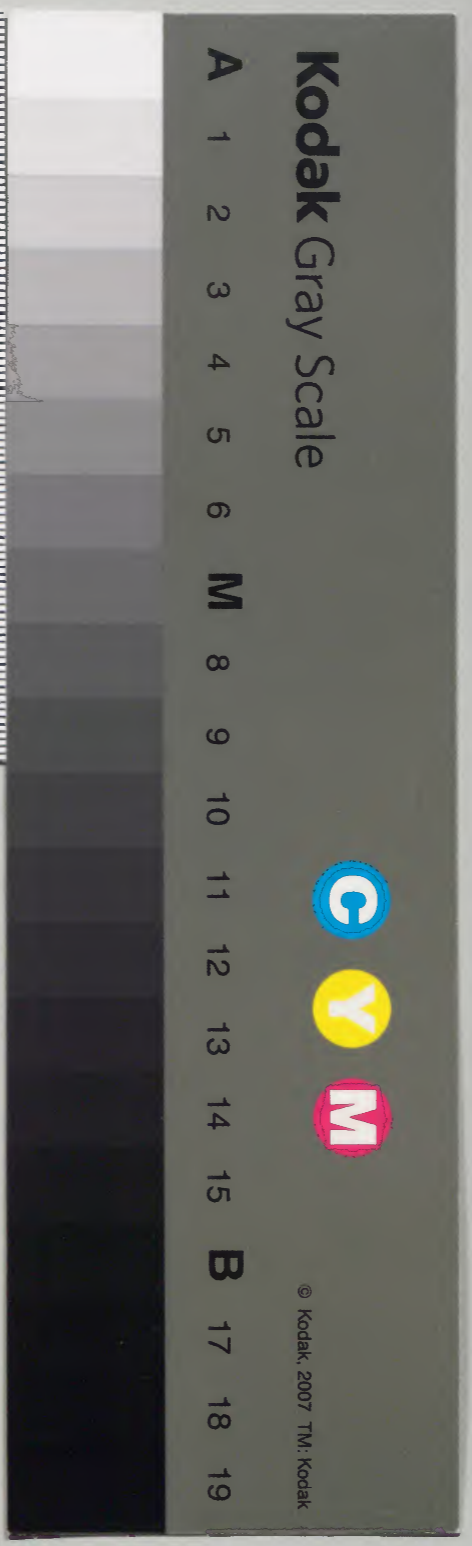


寛永諸家譜

清和源氏甲九冊之内
義家流之内新田流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (9)
函號	特 76 1





杉平

寛永諸家系圖傳

清和源氏

甲子四

義家流ハシラシ

杉平

長親チカサネ慶流ケイリウ

長親チカサネ

信忠ノブタカ

淺草文庫

親後ちかご

三郎次良

右馬助

康親きんちか

右京亮

筑後守

東照大権現とうしょうだいこんげんに侍まへりし人ひとなり
長元ちやうげん元年大御番おんみばんにあづかりし人ひとなり
同十年八月七日どうじゅうねんはちがつななひにあづかりし人ひとなり

源五郎下げんごろうげに叙ぎせし是こゝに清諱きよとがなの康きんの字ななり

元和げんわ三年二月げんわ三年二月にあづかりし人ひとなり五十一歳いそひじゅういちさいにあづかりし人ひとなり
法名ほうな良心りやうしん

康盛きんせい

右京亮

筑後守

後

筑後守

元和二年正月げんわ二年正月朔しつの十日じゅうにちにあづかりし人ひとなり

元和二年正月朔げんわ二年正月朔の十日じゅうにちにあづかりし人ひとなり

五位下ごゝげに叙すぎ

康徳こうとく

字右兵衛尉

寛永七年七月十九日

お軍家おぐんかとありて清きよ小姓こせう徳とくの法のほ

番ばんと勅とくし

康徳こうとく

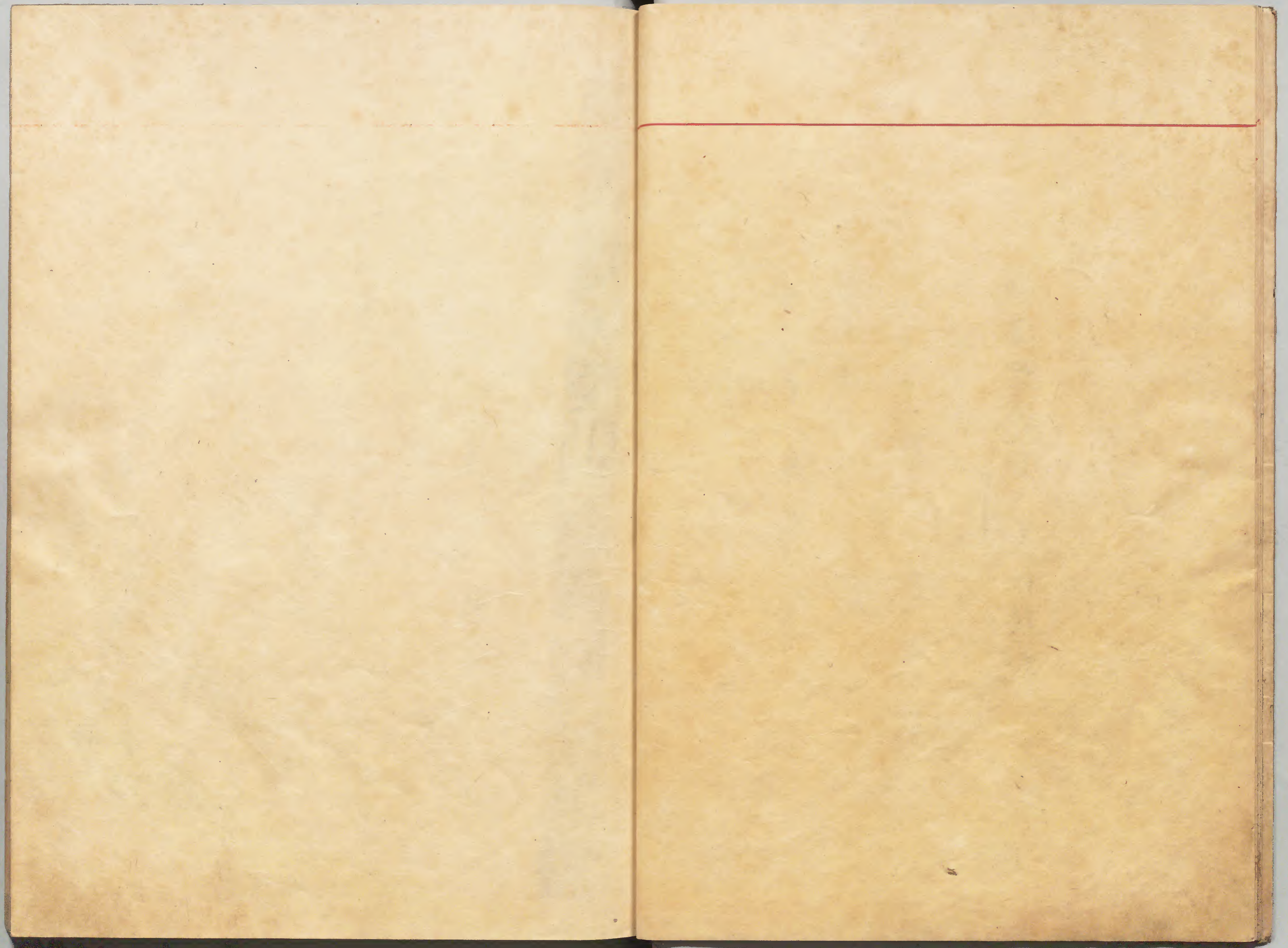
三郎さんらう

寛永十八年六月朔日

お軍家おぐんかとありて

筑後守康盛ちくごしゅこうせい

家紋梅いばし花はな



信定 のぶさだ

与一内膳正或いり親盛が兄なり
橋井と号す

享禄二年五月廿日 清康君牧野

伝次傳茲新次新茲と三列御油ん

合戦のとき信定をいひし子清定

清康君れ命をうけし平の法令と

はつとらして戦功のり戦をうて志づ

引きあがりさし午の刻に又とんで下地

信定清元先かけともわて尾列れ勢と
と合戦のとき 清康君れ命ともあて
同年尾列料野におわく尾列れ勢
て吉田の城に入たまふ
らへく討死すともわつらと日河ととも
のちお傳次傳新次新義まくととも
先とつともいへく大と務利ともわく敵
さげ信定清元とともふ死しひなまひ
況しとつら 清康君れつら純とつら

とひらと守は軍功少料野を給つらとあ
清康君義場とのうとたまふと信定先
とともつけともつらて功ともなまふとつら
か 清康君御逝去の後一族清家
人ましく信元とともつらとつらと家督のこ
とともは長親のなともわ 廣忠卿を
勢列ともわしととも忠清の城に入たまふ
天文七年十一月廿七平寸 法名道見

義春

東條甚太郎

利長

友井亮四郎

法名表雲樹祥

天文九年

廣忠御山一

族源次郎信

康がひり利長等へ命じて安福の

加勢としてかこひしこさ城申す

たてごもりし

六月六日尾列の大軍をさりし

し城を安祥たる助長安がひり利長

も城戸をひりしと申す

康甚るる康忠長家うれおは信

元林友助内友善九郎のを返す了敷十

人討死す尾列勢も又おちく

島八右衛門等夫と申すらて教を

利長士率と申すけし

らゆへ尾列勢うれうかんと

城介陣すしんじほわしりら

清定

与一内膳正

享禄二年牧野と合戦のとき父と

甲く清康君とあつた戦功は

天文十二年十月より平寸法名道在

家次

監地

永禄元年

大指現家次命令して尾列科野を

む尾列の兵附城とさういふことせむ

家次相うらよして廣瀬元竹村孫七郎

破田金平戸崎平九郎流石傳と名を討

とらうの外難兵敷とすこもあは

尾列の敵兵としく敗れさうゆか

く科聖の城をたたり今川義元氏真
るの功と稱して感懐とさげ

同六年し川氏志三列岩略寺らお
ゆき出城とゆき侍七頭とさへて
かこきとまひし

大指現御おるりて家次と先子とて

こまことせめし家次 命とつけて他
れ無返もど一寸の勢とついで昂時小
うれ城とさへり後河勢殺軍とさへり

とら

同年七月廿九日 率去 法名道親

忠正

5-1

永禄十二年し川氏志後府と没落

して約比奈備中守が居城を引置川
の城をたてこりりとら出と天王山小

うまふ

大指現津馬ととせきまをせめ後不
とせき忠正の勢と引かき先陣と
さきみ貴戸と御より旗馬とさきと
屏除ははちくさう御く屏のうら
とせあつ時と佐よりして忠正の勢は
けしとひとさきと子連人敷とつめ
て陣とさきとあし
大指現忠正今日の軍功はつらと後
美かりとて御はとと後つらこ

れと感せらる
え龜元年六月織田信長淺井の倉
と江列姉川とあわと合戦の時
大指現津の勢とて御ととせきと
倉の勢とつらとさきと忠正戦場とあわ
いさみだつとさきと粉骨とさきと
勢のまことつらとら

天正元年正月つらと後浪新の江列
野田城とたつとさきと甲列とら

是とせし忠正

大指現の命とつけなむら城いづちう中の加勢かせい

あししこころは是とせし忠正

同三年五月

大指現信長おびきまと同く士平しへいとつゆ武

田猪頼たろうらと三列なご長藤ながふじあは合戦あひざのとき

忠正しゅうせい士平しへいと下げ知ちてあは武田たけだ共どもと

うらとら信長しんちやう忠正しゅうせいが軍功ぐんこうと感かんぞら

同五年七月廿日率去、二年にふたとし田原たはら

法名道春はふなみちのる

忠正

与次郎よじやう

忠正しゅうせい死し後ご忠正しゅうせい家督けとくとせし

天正九年二月てんしゅうくわんにがつを列れつふをを津つの城のしろと

せめこころは是とせし忠正しゅうせいとつゆ

大指現おびきまの城のしろ没落ぼつらくのほ同おな武田たけだ防ぼ城じやう

あはしこころは是とせし忠正しゅうせいとつゆ

大指現の領ありて教の曲輪一町とせめ
とら龜の甲曲輪と名はく

大指現乞と感^んたもい三列の東條
と橋井の福地曰る石法加増^{かぞへ}て

忠吉を領する所ち又尾列料^{まうの}登
りて二子石の地と給^{たま}り

同十年六月廿日率去二十四歳
法名道隣^{だうま}

家廣^{いえひろ}

内膳正

忠吉率去の辰家督とほく

天正十年

大指現甲列^{おほさき}涉入^{しりぞ}玉の町軍役と勤^{とよ}し

同十二年尾列小牧陣のとき森^{もり}居

藤羽黒^{ふとうくろ}酒井左衛門尉三列^{さんれつ}勢

三子^{さんこ}能^{のり}勝^{かつ}と川^{がわ}かき^{かき}是^{こゝ}を^をし^し家廣^{いえひろ}

信長の武田の家に集りて
の教をあらせしこうしらしらる

大指現の侍もす

同年武列の松山城にたましらるにか

石と傾す

同十九の奥列陣に

大指現の侍もすのときに家廣佐也

七月より十月まで申上りの

城の番と勤し

法名道曜
六月十四日の卒を二十日卒

信長の

伊豆守

信一の春ら子となりて板井の女となりて

母ハ

大指現の御妹なり

家廣いさひろは信吉のぶきちが異父同母の兄なり

忠頼ちかより

右みぎの元 従五位下 母はは信吉の母

家廣病やまひりつ久ひさ忠頼家督ちかよりとほく

延文長五年七月興たか列陣りくじんの時とき

大掾おほのつむぎ涉わたり忠頼ちかより供たごをす

同年九月流なが列陣りくじん 同どう原はら涉わた陣じん

大掾おほのつむぎ江戶えどより涉わたり忠頼ちかよりのとき忠頼ちかより

供たごをす 二列ふた忠頼ちかよりより

大掾おほのつむぎの命いのちより忠頼ちかよりの城しろと

まじり 関ヶ原せきがはら落居おちは尾列おし大おほの城しろ

の爲ため主ぬし番ばんと勸すすめり 於おち金かね城しろを

番ばんす 千ち領りやう松まつ山やま一ひと万まん石しやくの介かゝ金かね山やまを

一ひと万まん五ご千せん石しやくと領りやうす

同どう長なが二月ふたつきを列り流なが松まつの城しろと給たまり

五ご万まん石しやくの地ちを 一ひと万まん石しやく城しろ米こめ五ご千せん石しやくと

領りやうす

同八年

大権現^一神上^一流の流^一とく小^一浜松^一の城^一と流

神^一ありととと吉^一光^一の神^一脇^一指^一とと

傾^一可

同十年

右^一流院^一敷^一流^一と流^一の河^一浜^一松^一の城^一と入^一流

り

同十二年^一後^一府^一流^一城^一の普^一清^一と勅^一し

同十四年^一九月^一廿^一九^一日^一率^一去^一二十八^一歳

法名^一淨^一在

忠重

大膳^一大^一使^一 從^一五^一位^一下

母^一八^一織^一田^一有^一宗^一しととめ

安^一長^一十^一五^一年^一武^一列^一涼^一石^一の城^一と給^一り

八^一子^一石^一と傾^一可

大^一坂^一安^一友^一の流^一陣^一の^一ととさ^一江^一戸^一竹^一橋^一橋

田^一江^一の流^一の^一安^一と勅^一し

元和四年しちごしの秋、赤土津城の普請と勅し

同五年津と海のとよき江戸の丸の

津多守妻むすめより

同六年しちごしの丸の津普請と勅し

同八年十月と総兵佐賀の城と始り

一万石と領す

同九年津と海のとよき佐賀の居城と

て立妻す

寛永二年津と海のとよき房列百首

浦和子の妻と勅し

同四年八月より翌年八月まで大坂

れ城と立妻す

同六年西の丸石垣の津普請と勅し

同年銀治橋の津堤の普請と 佐つ

け

同九年十月より翌年三月まで後

府の城と立妻

同十年七月より八月まで

江戸竹橋の法門番と勤し

同年八月

將軍家の釣命えんめいより後列田中ちゅうちゆうの城より
うけり二万五千石あり付す。ちよと康元
の御馬ごまとく〜さら

同十一月御と法ほつの法ほつとく 田中乃城

小法せうほつ御ごりり〜ときと團次だんじの法ほつ照てい持ぢを

らべし銀子二百枚を領す 是御こごの

ときと五千石の法ほつが増まとく〜さら

同十二年八月を列けい龜川かめがわの城じやうと給たまり

四百石と領す

同十五年八月より翌年しやくねん二月まで

後府法城ごほふほつじやうの法ほつ普ふ法ほつと法ほつとく

同十六年二月十九日平ひらを二十九日

法名道ほつなみち法ほつ

忠ちゆう直ぢゆう

漢詠守 漢五位下 母ははとと同どう

安永十七年七月十一日
御軍家とありしより
御軍家とありしより

御法を云々と勅し

あるごかげ

元和五年十二月
御法に叙す

あまえん

寛永十六年七月
御法書院の御

願と御法

忠氏

三十七郎

寛永十七年三月
御軍家とありし
御軍家とありし

忠成

官内

忠勝

長七郎

おののけいし

松平隠岐守定勝
御法とありし

宗長 むねなが

因幡守 泛五位下

忠好 ちゅうこう

左京左衛門

忠利 ちゅうり

織部正

寛永二年七月

右注院敷とあり

同三年四月法を習のちまゝと勤し ごきんぎふ かうごころ

同年十二月法切米五百俵と給ひ せうせき

同八年十一月子石の奉地と歿す こいし

同九年六月

右軍家の釣家よりりて法書院番と えんが ほうしょいん

勤し

同十年二百名の法加増とあり ほうかぞう

女子

母ハハ木下右衛門キノノ更マシ延ノボ後ノチがシすメ
織オリ田タとト野ノ介ノにニ緒ヲがガ妻メ

忠政チカマサ

万助

寛永キョウエイ十ジュウ五ゴのノ二ニ月ツキ島シマ川カハとトりリしシめ

信ノブ列レツ飯イヒ正マサのノ城シロとト給タマりリてテ回マりリとト領リョウ

地寸

同年七月ツキあるアル云イハ来キありリしシ

乃ノ軍イクサ家カとト有アル備イしシをヲもモり

同年九月ツキより十月ツキふフくクらラもモくク江エ戶ウ津ツ

本ホ丸マルのノ掛ケけケたタれレ津ツ普フ清セイとト勤チンしシ

同十七年ツキ四月ツキ日光ニクホウ津ツ社シャ集シツのノとトもモりリしシ

大オホ橋ハシ津ツのノ番バンとト勤チンしシ

同年八月ツキより翌ツギ年トシ十一月ツキふフくクらラもモりリしシ

橋ハシのノ津ツのノ番バンとト勤チンしシ

同十八年ツキ十一月ツキより翌ツギ年トシ五月ツキふフくクらラもモりリしシ

て田安の清の妻と勤め入りきり大橋の
山門番とほむ

万助忠政 家紋葵別紋九曜

信のぶら

初ハ後井勘甲印
浪田信下

伊豆守浪田信下

永禄三年三列新屋八所ふおわく尾
列同この名と合氣のとき味もささふ
敗北せんとき一とさ信一の勢とつく
教とさひまらけ味も勝利とぬら
同回の後列糟屋名長場三列長江の城
ふら〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

東照大権現は一命して中どの城とま

らめておきんと守長はが共出張して

度におきか信一宣長のさへむら

骨とほく守るむら

大権現はあつたのまき信一諸人えら

て城中小せめしり教のまこころらて

はかふ城とあし守

石ヶ瀬二度の合戦は一ひとこひ

てたうひと使す

回りの列や一白糸蜂起のまき野寺

れおきんとておしきこらふおき

つてたうひと使すまき

の門流方より一撥とあし

おき信一とせしむ敵とまき

勝利とねりろのあし針流

大権現の法あふおわくまき

教鉄炮あし信一が右の服とつ

まきとあつたあし守教とあし

よらつて誇る守は一おさひりりてさ
しせく鉄炮てつぱうとそつりもの田舎あつちのし

こささるの敵あつち引あがりく

大指現に一が勇力ゆうりきつりてさそせ

と感かんし

同十年位も義昭と二夜せよとてん

めは引征伐の時さか勢せいと

大指現よらつてさ一おさひりりて

ししつは一せつと信ちとつる

信長は信久も右場の討に受し使して一方の
先陣せんじんとらぬさあしつしはしあ
信一しんいち流ぬ先づらして眞作の城を
介かいとらやう流ぬもあはくすん
てせあつら二丸も危づるとも死一
くのおつりてさ平とみは信一
えとらつとくしつりてさあつら
えとらつとくしつりてさあつら
ふせあつとくしつりてさあつら

いさゝか三列松平勘十郎信一にありて
城にありていさゝか三列松平勘十郎信一にありて
主建部源八郎初郎にありて
家善作没落寸先ふりて依り木兼頼親
善寺山と持て甲賀より不聖日信一
信長よりすみの信長れいさゝか三列松平勘十郎
謀りたりと久し感づて是より示
の相の紋は皮ぬきとす信長とあり乃
とき信一は信長義昭をお軍ふ

居たりて信一にありて
鉄炮一挺と給りて三列にあり

大権現ふりて
長の一は羽織鉄炮となまらるると言
とあり

大権現ふりて
同十一年尾張竹田村に修理ありし川
氏の信長ふりて五中の一撥とあり

を引^{ちり}延^び河^のの城^{たて}たてこもりとき
大^シ指^し現^る初^めくを引^き入^りるも右^ニ士^率不^し
命^をして六^のの城^と一^の内^にせあが^り賊^を流^す
と建^てく謀^すく^はし^のの^は佐^とら^の林^原小^を集^め
康^政先^づけ^して屏^をふ^しは^して^は心^をか^つち^る
信^一と^らみ^もと^んで^は城^をお^ろす^士率^はい^て
せ^あら^の城^を擲^すと^らや^がら^の城^中の^者と^こ
と^くく^の謀^す
元^龜元^年六^月廿^日の^婦川^合戦^のとき

信^長の^淺井^とし^らい
大^指現^の初^めく^はは^しの^先の^先の^先
す^くふ^の敗^れも
大^指現^の先^陣の^先陣^をみ^もと^んで^は信^一と^らの^馬と^し
せ^くた^らひ^と使^して^は甲^冑二^級と^らら^る
少^の味^方の^少味^方の^少味^方の^少味^方の^少味^方
これ^も初^めの^敗れ^も
天^正三^年長^祿合^戦の^時は^一士^率と^し
け^もして^は我^功の^り

同十二年尾列小牧陣のとき信一

大指現まゝ〜まゝいまゝなりて我忠せんと信一

同十八年小田原陣とどろに信一

とま五五

大指現

台座院教皇列かま京務征伐のま御まを教の

とき信一字部いまはあわ〜

右座院教皇福あつ〜まあまのま御ま起の

〜まあまもま御まと海うみなりて

是とたしりげ始はり〜

大指現ま依よ行ゆ義宣ぎが教皇かのまあまのま御まを

涉せ羅ら本ほんにあわ〜まあまと名な〜

信一しん布ふ川の城しろ〜まあま依よ行ゆが

と信一言しん〜まあま家か涉せ一いち代だいのまあまを

我場がふら〜まあま一いち度どもまあまを

か〜まあまこのまあま我場が〜まあまを

ハは〜まあまとまあま釣命つひな〜まあまを

〜まあまあまのまあま〜まあまを

たく是とまのるぐさめりし領事す

同之の常陸国土浦の城と居りし法加増

ありて三力五子と領す

同年没五位下叙し伊豆守小任す

同七年四月依行武とのうかりにし常

列江戸橋の城番と勤し

同年七月信吉とありて左衛門尉

を同国水戸の城番と勤めし翌子の常

心く

同九年没四位下小叙す

寛永元年七月十九日卒去法石道雄

信吉

伊豆守 没五位下 安房守

実ハ松平と改命忠吉が子なり

安永七年四月常陸府中の城番と

勤め同七月よりありて六郎兵衛と改

て又又信一よりありて十二月より信

誘まねの城番じやうばんと勅しし

大権現おほごんげんは名ながその城番じやうばんと勅しし

いそがたまひく別わかり五子ごし石いしの所ところを

下くださる

同九年どうくわねん没なげ五位ごゐ下げに叙しよし安やするる

任にん寸すん

同十年どうじゆねん

右みぎ位ゐ院ゐん院ゐん殿でん法ぽうと法ぽうりりて右みぎ軍ぐん宣せん下げ法ぽう

参まゐ内ないのともも信のぶ右みぎ騎き馬ば少せうくく左ひだり方かた列り

のど首くちらぎとちり

同十八年どうじゆはちねん 鈞きん命めいあありり松しょう平へい甲か斐ひ守しゆふ

りりて伏見ふしの城番じやうばんと勅しし

同十九年どうじゆくわねん大坂おほさか乱らんのと紀き信のぶ右みぎ伏ふし見みのと也なり

井い伊い掃そう部ぶ以い松しょう平へい隠いん波は右みぎ板いた倉くら伊い賀が守しゆ法ぽう

通とほ山城やまぎちちととおおししかかりりててああのの見みとと法ぽうり

大坂おほさかのの密みつりりととままりりてて江え後ご河が守しゆ法ぽう

大権現おほごんげん

右みぎ位ゐ院ゐん殿でん法ぽうとと法ぽうりりて十月じゆっがつ信のぶ右みぎ命めい

て小出大和をとりつりて信和の城しんわのしろをとり
しむ十一月奉書ほうしょとたがりて信和に
城しろと小泉をむきつりて信和、平野をむき
居しれ信和もあたらりあせふじり
このとき平野丹波を同若狭をしりし陣
寸このころ大坂よりさき附城つりしろとさ
いしく信吉をたねに居し新居、越前をたねに居し
海よりしりて翌年正月ふじり
右連院殿伏見みづのべの城書を勤し

うしうしにち又伏見の城書を勤し
え和え四月城書を勤ししりて四月、備後を
右連院殿に居しりて大坂より陣すべし
任りしりて四月、伏見より飯盛よりさ
て陣すべし五月七日大坂合戦のとき信和
先よりりて戰場よりせしりし法華と
下しりて志功とねさんば友孝、和泉守より虎
大掾現しりしりてすうけり茶磨しりておろく

もろ
を湯す 佐ふいしくか
たうとる虎が申しねおたうぞ
さめわし次
御感

同年五月大坂より伏見よりつらて又清
書と勤し

一して江戸より海
同三月常陸大浦の城とつらめど野高

崎の城よりつらて一万余石法書とる等

同五月この崎の城とつらめど母波巻の城
ようつる紙代本のさし

同五月八月朔の率寸 法名京次

忠國

山城守 浪五位下

安永十二年御あり

大権現

台座院敷とありしなり

同十四日十二月廿七日

右徳院殿の清あはくえ胎げんが一いんまの忠たけれ
字と結りり清判せいはんがいびふ包氷ふかのい腰こしお
とあはく一山城やましろちとあす

同十九年正月迄五位下ご下あ叙ぎす

元和元年五月七日大坂合戦おさかあひざりのときち又と
いづく先陣せんじんよりりて軍功ぐんこうをあげし
甲首かぶさき一級いっけいをととりて

右徳院殿の清読せいよみよりりていふいれいまいといは

感かんり

同七年六月十日 東福門院とうふくもんいん清入内せいりうちれ時

侍まじりし列ら一騎馬きばよりりていまいりいのい首くびと
かり

同年このとし父ちち信のぶ右みぎがいまいといはいといぬい領りやうす

同八年二月廿六日馬うま之の善よき頭かぶ一い代しろりい丹に
波なみ福ふく地ち山やまの城しろ善よきと勅しやくめ八月はちがつふいりいて城しろ
善よきと思おも初はつ内うち膳ぜん正ただしいといはいす

同九年八月廿七日

右軍家征夷大將軍小任^{いん}ぎ^んま^らは^らし^まる^べし^たる^に時^{とき}泰^{たい}内^{ない}の時^{とき}
忠國^{ちゆうくに}務^むる^にし^て任^{にん}を^をし^りし^て右^{みぎ}方^{かた}の^の列^{りゆう}れ^い
と首^{しゅ}と^とち^りり

寛永三^{かんえい}の^の九^く月^{げつ}の^の二^に條^{じょう}の^の城^{じやう}に^に行^い幸^{さう}の時^{とき}
右^{みぎ}軍^{ぐん}家^け法^{ぽう}し^しる^べし^たる^に時^{とき}泰^{たい}内^{ない}の時^{とき}
列^{りゆう}れ^いの^のと^と首^{しゅ}と^とち^りり

忠晴^{ちゆうせい}

伊賀守 從五位下

寛永十二年^{かんえい}の^の初^{はつ}め^めに^に
大^{おほ}掾^{せん}を^をな^らむ

同十四年^{どうじゅう}の^の二^に月^{げつ}の^の廿^{にじゅう}二^に日^{にち}に^に
右^{みぎ}法^{ぽう}院^{いん}の^の法^{ぽう}の^の少^{せう}く^くえ^え服^{ふく}の時^{とき}法^{ぽう}院^{いん}の^の忠^{ちゆう}
れ^れ字^じを^を給^{たま}は^らし^める^に時^{とき}法^{ぽう}院^{いん}の^の忠^{ちゆう}
服^{ふく}を^を頂^{たう}戴^{たい}す

同十八年

右^{みぎ}德^{とく}院^{いん}殿^{でん}に^に命^{めい}じ^しる^に時^{とき}法^{ぽう}院^{いん}の^の忠^{ちゆう}
大^{おほ}坂^{さか}の^の法^{ぽう}院^{いん}に^に命^{めい}じ^しる^に時^{とき}法^{ぽう}院^{いん}の^の忠^{ちゆう}

を侍す

元和元年三月廿六日五位下トongoke叙す

伊賀守え小任す

寛永九年四月七

右軍家の位よりして清書院番の次となり

同年采地の清が宿とも任す

同十一月十日 釣合よりして清養志

番と勤し

同十一年

右軍家清と清の位をす

同十二年十一月十日大清書院の頭となり

同十二年十月十日後聖子の十月ふいし

後府に城番と勤し

同十三年四月十日聖子の四月ふいし

二條の清城に番向す

同十九年七月廿六日江戸と改して八月

十の太坂ふいし城番と勤し事十九

日ついで同月廿六日 召ふ意にて江戸ふ

おとししき九月つる後引田中の城と居
りて二万五千人と領寸

忠俊

刑部少輔

寛永十三年八月十八日

お軍家とありしなり

信久

勘定所

寛永十一年乙未九月

お軍家とありしなり

山城守忠國 家紋は葵とわらわしとくも御苗
あしとくわらわしとくも御苗 鳩酸草とくも御苗
かへ又桐と御事ハ信長と信一と孫つる
皮羽織の紋なり

